

固定観念と定石

大和田囲碁同好会 成田 滋

1954年製作の「十二人の怒れる男」というアメリカ映画があります。映画では、ある裁判で一人の陪審員が他の11人の陪審員たちに、固定観念に囚われずに証拠の疑わしい点を一つ一つ再検証することを提案します。やがて少数意見が多数意見となり無罪評決となるというストーリーでした。イスラエルでは会議をするとき、もし出席者7人のうち6人が賛成する発言をしたとき、7人目の人は無条件に反対意見を述べなければならないというのです。多数とは違う少数意見はそれ自体に価値があるかもしれないという考え方です。イスラエルの格言にもう一つ。「何も打つ手がないときにも、ひとつだけ必ず打つ手がある。それは勇気を持つことである」というのがあります。

この陪審員の評決に関するエピソードを囲碁に当てはめてみますと、固定観念を捨てる時思わぬ妙手が生まれるときがある、ということかもしれません。最近では定石の考え方が変わって、新しい定石が生ま



映画「十二人の怒れる男」

れていきます。こうした変化には、固定観念から離れて新しい手を考えて打とうという姿勢があるからです。そういえば「定石を覚えて二目弱くなり」という定石信奉者を皮肉った川柳があります。

固定観念は人の経験や得てきた知識から形成され、思考の基盤にはなりますが、自由な発想を制限します。まだ考えるための時間の余裕はあるのに、固定観念の枠にはまってしまくと、固定観念の枠の中で堂々巡りし行き詰まり状態になることがあります。固定観念と同じく「既成概念」とか「ステレオタイプ」な考え方があります。ステレオタイプは元々、「判で押したような考え方や類別を意味し、多くの人が同じものを共有している状態」のことです。「紋切り型」という言葉もステレオタイプを表します。多数の人々のなかで、同じような考え方や見方

が類型化されて共有され、なぜかその思考や見方が妥当と確信してしまう現象です。

そこで、固定観念による堂々巡りを脱して自由に発想するためには、発散的思考法である「ブレインストーミング」が使われます。他者と共に考え自分になかった観点、自分になかった視点に対する気づきを得て、固定観念から脱却することができるきっかけとなります。誰かが支配的となってしまうことを防ぐために発言数の偏りを避ける調整役が必要となります。イスラエルの会議で1人の発言者が反対意見を述べるという場合もそうです。私には後学のために役立つような含蓄のある格言です。

定石で難しいのは周囲の状況によって変化することです。定石の手順を丸暗記して不利な結果になることはよくあります。このような場合はどうしたらよいでしょうか。不利になっても先手をとること、あるいは手を抜いて別の箇所を打ちながら考える、というのはどうでしょう。勉強を重ねていないと駄目ですね。